



TITLE:

後続歯胚摘出および歯根損傷時における乳歯根の吸収状況に関する実験的研究ならびに周囲組織の生物学的態度について(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

三光寺, 博昭

CITATION:

三光寺, 博昭. 後続歯胚摘出および歯根損傷時における乳歯根の吸収状況に関する実験的研究ならびに周囲組織の生物学的態度について. 京都大学, 1967, 医学博士

ISSUE DATE:

1967-05-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212223>

RIGHT:

氏 名	三 光 寺 博 昭 さん こう じ ひろ あき
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 357 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	後続歯胚摘出および歯根損傷時における乳歯歯根の吸収状況 に関する実験的研究ならびに周囲組織の生物学的態度につ いて
論文調査委員	(主 査) 教 授 堀井五十雄 教 授 美濃口 玄 教 授 西村秀雄

論 文 内 容 の 要 旨

著者は生後2.5月～3.5月の幼犬を実験動物に選び顎骨内に発育中の歯胚を摘出し、後続永久歯歯胚が欠如している場合と同様の環境下においてはたして先行乳歯の歯根に吸収現象が発現するであろうか、発現するとすればどのような状態で進行してゆくか、また後続永久歯歯胚の欠如が乳歯根の吸収にどのような影響を与えるかを実験的に研究を進めるとともに、歯根に損傷を受けた乳歯の示す生物学的態度についても組織学的に検索し次の結果を得た。

- 1) 発育中の歯胚の摘出手術によって生じた顎骨体の欠損部は周囲より増殖する肉芽組織により急速に填塞され、さらに摘出窩の壁面から増殖する繊細な網状骨質によって修復され、幼犬顎骨が創傷に対していかに旺盛な治癒能力を有しているかを知ることができた。
- 2) 正常犬の乳歯根は生後2.5カ月ごろより吸収が始まり、後続永久歯歯胚に最も近接する部位に発現し、乳臼歯において歯根分岐間および歯根内側の中央部附近より吸収現象が開始される。
- 3) 後続永久歯歯胚を摘出しても、乳歯根の吸収現象は正常歯と同じ部位に発現する。
- 4) しかしその進行速度は正常歯の場合に比較すると著しく緩慢であり、一部では吸収機転が停止し、また吸収窩はセメント質の添加によって補修されて機能の減退を防禦し乳歯が長期残存して正常咬合関係を保持せんとする組織像を呈している。
- 5) すなわち乳歯根の吸収現象は乳歯自体の有する生物学的態度の発現とみるべきであるが、また後続永久歯歯胚とは密接な関係を有し、その発育萌出によって吸収は加速的に進行するのである。
- 6) 後続永久歯が埋伏状態となって顎骨内に埋伏する場合には一旦開始された乳歯根の吸収は微弱となり、乳歯は長く口腔内にとどまるのである。
- 7) 乳歯の歯髄は強靱な生活力を有し、歯根の損傷に対しても抵抗しよく固有構造を保持することが可能である。
- 8) しかしながら、損傷がきわめて大きく歯根が破折するような場合、乳歯歯髄は循環障害のため線維

性結合組織に化生するとともに乳歯自体も異物化され、ついに顕著な吸収機能をこうむるに至る。

9) この場合においても一旦破壊された歯周組織は再び修復されて咬合機能の減弱を補強し、歯周組織としての生物学的態度を明らかに現わすのである。

論文審査の結果の要旨

歯牙の交替という現象は、生理的に機能を運営中の器官が吸収交換されるという他に類例のない事態であるが、それに伴う最も重要な現象である乳歯歯根の吸収は後続永久歯歯胚の発育による圧迫のためとも説かれているが、はたしてそうであるか、さらにじゅうらい比較的等閑に付されていた乳歯の生物学的態度などをも研究する目的で、著者は生後2.5~3.5カ月の多数の幼犬を用いて実験的に後続永久歯歯胚を摘出したばあい、および乳歯歯根に損傷を与えたばあい、乳歯およびその歯周組織がどのような生物学的態度を示すかを検討し、つぎのような結果を得た。

1) 一般に正常乳歯歯根は生後2.5カ月から吸収現象が始まり、その初発部位は後続永久歯歯胚に最も近接する部位であり、乳臼歯においては歯根分岐間および歯根内側中央部付近であるが、後続永久歯歯胚を摘出しても、乳歯歯根の吸収現象は正常歯と同じ部位に発現する。しかしその吸収速度は正常歯に比べて著しく緩慢で、一部では吸収機転は停止するか、あるいは、いったん生じた吸収窩はセメント質の添加によって修復される。すなわち乳歯歯根の吸収現象はそれ自体の有する生物学的特性の発現ではあるが、後続永久歯歯胚とも密接な関係を有しその発育萌出によって加速的に進行するものである。

2) 同様に、後続永久歯歯胚が埋伏状態となって顎骨内に止まるばあいは、いったん開始された乳歯歯根の吸収は微弱となって、乳歯は永く口腔内にとどまるのである。

3) 乳歯歯根が損傷されたばあい、歯髓組織は強靱な生活力を示し、歯根の損傷に対してもよく対応しその固有構造を保持するよう努めるのであるが、歯根が破折されるような大きな損傷のばあいは、歯髓は線維化され、乳歯歯根そのものにも顕著な吸収現象が発現する。

4) いずれのばあいも破壊された歯周組織はおうせいな修復現象を示し、咬合機能の減弱を補強し、歯周組織本来の生物学的態度を保持せんとするものである。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。